

(別紙 1)

論文内容の要旨

論文題目 中国仏教における永明延寿の思想研究—延寿が再編した仏教観と後世における延寿像—

氏 名 柳幹康

本研究は、永明延寿(904—975)を、中国仏教思想史を踏まえた上で分析したものである。従来の研究では、文献整理・文献乃至教理の分析・後代への影響の調査等が行われたが、思想史的観点からの分析はほとんど為されていない。だが、延寿は唐代の多元的な仏教観を再編し一元的な仏教観を提示するとともに、後代の人々から高い評価を得た人物である。分析に当たり、思想史を俯瞰する視座に立つことで、従来の個別的研究では見えなかった延寿の姿が捉えられる。

本研究は6章から成る。

1章は「序論」である。

延寿は五代十国の時代、呉越国で活躍した禅僧である。「不立文字、教外別伝」を標榜する禅宗には珍しく、多くの著作を残した。とくに主著『宗鏡録』は100巻にも及ぶ分量で、その思想は教宗と禅宗を統合する「教禅一致」、禅宗と浄土宗を統合する「禅浄一致」として知られる。また、日々108種の修行を実践したと伝えられ、その内容は多岐に及ぶ。では、延寿は如何にして、本来異質な思想を統合したのか。108種もの実践はいかなる整合性を持ちえたのか。なぜ多くの著作を残したのか。『宗鏡録』が100巻にも及んだのは何故か。これらの疑問を提示し、本論への導入とした。

また延寿研究の専著を紹介するとともに、本研究が従来無かった思想史の観点を導入することを述べた。具体的には、延寿が従来の仏教観をいかに再編したのかを4章で、後の人々が延寿をいかに理解したのかを5章で、それぞれ論じる。

2章「延寿の人物像」では、延寿の生涯を祖述した。伝世資料のほか、新出資料「永明智

覚禪師方丈実録」を用いた。

「実録」は、^{ねいし}靈芝元照 (1048—1116) の撰、宋版『註心賦』に収録される。これまで不明であった延寿の詳細な足取りとともに、仏塔建設や印施など延寿の大規模な活動の背後に、^{せんこうしゆく}国王錢弘俶 (929—988) の支援があったことが記されている。また、錢弘俶が建設した八万四千の仏塔の発案が、延寿にかかるという記載も見える。

各種の伝記資料が伝える延寿の生涯とは、以下のようなものである。延寿は 904 年に生まれ、34 歳、杭州で出家。天台山・金華・東陽・四明山・句章等を巡錫。天台^{とくしやう}徳韶 (891—972) から嗣法、その年は不明。960 年に錢弘俶に招かれて杭州の靈隱寺に住し、翌年永明寺に遷る。975 年、同寺で示寂。

延寿が実践した 108 種の修行には、執筆の一項が見え、法施・教化の行と位置づけられている。つまり、延寿にとって著述は利他行であり、その結果として多くの著作が残されたのである。

3 章「延寿の著作」では、主著『宗鏡録』を中心に、本研究が用いた著作について説明した。

『宗鏡録』は、宗（根本）が鏡の如き一心であることを示すため、各種教説を収録した書物である。永明寺住持期間 (961—970) に、天台・法相・華嚴の学僧の協力を得て成った。編纂にあたり延寿は、読者の理解に資するとして、引用の反復・要文の網羅を行った。その結果、分量が 100 巻に及んだものと思しい。

本研究が用いた他の著作は下記の 5 種である。『万善同帰集』3 巻、一心を根源とする無数の善行について論じる。『唯心訣』1 巻、仏教の要諦が唯心の道理にあることを示し、その観察を勧める。『心賦注』4 巻、あらゆる機根のものを対象とし、一心を悟る手掛かりを提供する。『観心玄枢』3 巻、一心の観察が仏教の要であることを示す。『授菩薩戒法』1 巻、菩薩戒を一心そのものと解釈し、その受戒を勧める。

諸書には、同一の思想構造が通底している。それは、一心が万有を現出し、万有はみな一心に帰す、というものである。その一心を提示するのが『宗鏡録』であり、その観察を勧めるのが『唯心訣』と『観心玄枢』、その看取を促すのが『心賦注』『授菩薩戒法』、これらに基づく善行の実践を勧めるのが『万善同帰集』である。重点の置き所こそ違え、これらの書は同一の思想を著述したものと理解できる。

4 章「延寿の思想」は、以下の 3 節からなる。

第 1 節では、禪宗思想史の視点から、延寿が「宗」に拠える一心の由来を分析した。

『宗鏡録』が一心を「宗」に拠える発想は、直接的には^{ばそ}馬祖 (709—788) の『楞伽經』解釈を承ける。馬祖は『楞伽經』の教説を「仏語心為宗（仏が語った心が宗である）」と解釈し、延寿はこれを承けて、「心を宗とする」のが仏意（仏の真意）であると理解した。加えて延寿は、「持戒」と「慈悲」の二件を心本来の特質として明文化し、馬祖禪に潜む墮落の危険性を回避している。

第 2 節では、『宗鏡録』が設定する「趣」（実践過程）を分析した。それは、宗が一心で

あることを信じ、「漸修」（段階的修行）によって「頓悟」（一心を看取）し、その後「漸修」を経て「頓修」（一念における仏事の完成）に至るというものである。どの段階においても善行の実践が勧められ、その善行には仏教の修行一般が収められる。なぜなら、一切の善行は一心に由来する点で等しく、各段階の人々を利するからである。これにより、一切の実践が一心において統合された。延寿が日々行ったという 108 種の修行が整合性を持ち得たのも、かかる理論に由る。また、後世において延寿が「禪淨一致」を為したと称されるのも、善行中に坐禪と念仏を等しく収めていることに由る。

第 3 節では、教判史の視点から、延寿の仏説解釈について論じた。インド仏教には所謂小乗・大乘の二つがあり、その思想は大きく異なる。だが中国には、両者が一つの仏説として流入した。そこで、教相（仏説の様相）を判釈し、仏説の体系化を図る教判が行われるようになった。天台・法相・華嚴等において各種の教判が構築されたが、それらはいずれも、特定の経典から仏意を抽出し、それに基づいて仏説を体系化する点で一致している。延寿に先んじて教禪一致を図った宗密（780—841）は、この教判の手法に則って、仏説と禪語（禪僧の言葉）を三層に分類した。その分類の基準として採用されたのが、『円覚経』から読み取った「頓悟漸修」である。一方延寿は、宗密の説を承けつつ、その上に「頓悟頓修」という境界を設け、そこにおいて各種教説の表面的差異が解消されるとした。その理論が「能詮・所詮」論である。能詮は指し示すもの、すなわち教説に当たり、所詮は指し示されるもの、すなわち仏意に当たる。延寿は、教説の外に伝えられた一心こそが仏意であり、一切の教説はそれを指し示す点で同じであると解釈した。これにより、教説の差異を分析する教判が解体される。

5 章「後代から見た延寿」は、以下の 3 節からなる。

第 1 節では、『宗鏡録』が入蔵するまでの経緯を論述した。『宗鏡録』は、延寿の没後に徐々に忘れられていったが、百年の後に宗本（1020—1099）により世に紹介され、二度の開板を経て 1107 年に入蔵した。宗本の紹介の後、わずか 40 年のうちに仏説に準じる權威が認められたことは、当時『宗鏡録』が珍重されたことを物語っている。宋人が『宗鏡録』から読み取った内容は、

- ・ 禪僧は仏として法を説く
- ・ 仏典を流通させることは仏恩に報じることである
- ・ 仏意を伝える禪僧こそが大蔵経を開板できる

等である。木版印刷が盛んとなり、禪僧もそれに積極的に参与した宋代において、当時の問題意識に答える思想の読み取りを、読者に許すものであったことが、『宗鏡録』が珍重された主要な理由であろう。

第 2 節では、後人が理解した延寿像を、蓮宗祖師と調停者の二種に大別し、それぞれの変遷状況を概観した。

蓮宗は中国の浄土教であり、宋代に盛んとなり、遡及的に祖師の法統を構築していった。延寿は当初、そこに含まれていなかったが、生前に念仏を行っていたこと、没後に極楽往

生したという伝説が生まれたことなどから、後に蓮宗の祖師として列せられる。明末の株宏^{しゆこう}（1535—1615）に到って高く評価され、明末清初に行われた浄土劇では蓮宗中興の祖と称されるに到った。

調停者としての延寿像も同様に、時代とともに評価が高まっていった。宋代では教宗（天台・法相・華嚴）の諍いを調停したと理解されていたが、明代になると中国仏教の宗派のみならず、釈尊以来の仏教全体を統合した人物であると評価された。清代に雍正帝（1678—1735）はその理解を承けるとともに、延寿を中国随一の導師と称した。一心をもとに従来の仏教を再編した延寿は、後代において人々から広く賞賛を受けたことになる。

第3節では、円爾^{えんに}（1202—1280）の『宗鏡録』受容状況に分析を加えた。円爾は日本における禅宗興隆の礎を築いた人物である。入宋して禅宗の法を嗣ぎ、帰国後『宗鏡録』の教禅一致の精神に則って東福寺を開くとともに、後嵯峨天皇や時の関白に『宗鏡録』を進講した。その著『十宗要道記』は、『宗鏡録』の教禅一致を日本の十宗に応用したものである。当時、宗派の垣根を越えて多くの僧侶が円爾の下に参じたことから、その試みが広く受容されたものと思しい。

6章「結論」では、五代において延寿が行った仏教の再編が、唐代仏教と宋代仏教を架橋するものであると結論した。唐代以前は諸宗が並存していたが、宋代以降は禅宗と蓮宗の二大潮流が中国仏教を席卷するとともに、両宗は融合の道を辿った。唐代には多元的だった仏教が、宋代以後一元化したわけだが、その狭間にあって一元的な仏教観を提示した延寿の思想史的意義は大きい。すくなくとも後代の人々は、その転換が延寿によって為されたものだと理解した。延寿を中国仏教の再編者とするのが、本研究の結論である。